

ぼくはもう大丈夫だよ

呉市立横路小学校

第6学年 丹下 漸丸

ぼくはもう大丈夫だよ

横路小 六年 丹下 漸丸

「行ってきますい。」

毎朝、笑顔で言っている。お母さんは毎日玄関まで来て笑顔で手をふりながら、「行ってらっしゃい。」

と言っていて、ぼくを学校に送り出してくれる。六年生になった。たぼくは、毎日学校に通えるようになった。一人で家から出て、早い時はクラスで一番に、教室に着くこともある。教室でみんなを待ちながら、今日はどんな事があるのかなとワクワクしている。ぼくがいる。

幼稚園のころのぼくは、お母さんとはなれてちがう場所に行くことが何故かこわくてお母さんのそばにずっといた。小学校に入学してもその気持ちは変わらず、毎日お母さんと歩いて学校に行っていた。学校に少し慣れたからは友達と行けるようになった。でも、少ししか続かず、また学校に行けなくなっていた。そのころの気持ちはあまりよく覚えていない。

が、ぼくは不安なことがある。たりすると心が
苦しくなっていた。例えば、連絡帳に時間割
を書いているにも（本当にあっているのか）これ
でいいの。と不安になり、次の日どん
な勉強を学校でするのかわからなかったりす
ると心がモヤモヤし息がつかまりそうになり
ていた。少しいやだなと思うと行きたくない、
いやだと心が悲鳴を上げていた。ぼくが、学
校へ行きたくないと言うと、お母さんは無理
やり、引張ってぼくを学校に連れていった。

担任の先生や保健室の先生が家に迎えに来て
くれたこともあった。それがぼくは嫌々嫌
で仕方なかった。そのころのぼくは、どうし
ても学校へ行く気にならなかった。二階へに
がて部屋にとじこもったり、屋根の上のぼ
ったり、走って逃げたりしていた。泣きじゃ
くっているぼくを無理やり引張ってまでも
学校へ連れていかれることがいやでいやだ
まらなかつた。何で学校へ行かなくちゃい
けないんだ。心がおかしくなりそうだが

らやめてくれ。一毎日のようにぼくの心はさげんでいた。そんなぼくを見ながら、お父さんもお母さんもどうにかしたいといっばい考えてくれていたそうだ。ぼくのことを必死に考えていることも知らずにぼくはへうろさい。ほっといってくれ。と冷たい視線をお父さんとお母さんに送っていた。イライラが止まらなかつた時は、自分でもどうすることもできず、物をこわしたり、人が傷つくことを平気でさげんだりしていた。今のぼくの心は、ひどいことをしていたという罪悪感でいっぱいだ。

ぼくの心は五年生になってからも変わらなかつた。その日も、いつものように学校に行きたくなかつた。ぼくに、お母さんは、行ってきなさい。と言ってきた。無理やり連れていかれることに心が限界になっていたが、ふん張って家を出た。足におもりがついていっているのかと思うくらい足もバも前に進まなかつた。はやっぱり

無理だ。ぼくの足は家に向かっていた。家に
着くとお母さんがいつものように学校に電話
をしはじめた。先生が迎えに来る。走って
にげなくては学校に連れていかれる。と思
った。しかし人間、家を飛び出した。へこのまま
どこかに行けば学校へ行かなくていいんだこ
と思いついて必死ににげたがどこへ行けばよい
のかわからなくて、かくれることができる所
にかくれた。どのぐらいその場所にいたかは
分からないが寒かったのもあって、家に帰る

ことにした。帰っているとお母さんがぼくの
方へ走ってきた。ぼくは絶対おこられるこ
とに覚悟した。でも、その逆でお母さんは全
くぼくをおこらなかつた。それよりも、
「ああ。よかった、せんくん。本当によかつ
た。ああ。よかった。」
と何度も何度も、よかつたと言われた。お母
さんもお父さんもおばあちゃんも泣いていた。
ぼくは何だか変な気持ちになった。ぐちゃぐ
ちゃな気持ちになった。今まで感じたことの

なかつた気持ちかドンドンこみあげてきた。
今までぼくが学校に行かないことでみんなに
迷わくをかけてしまつたからぼくなんていな
い方がいいんだ。』と思つていた。でもその
逆だつた。『ぼくはここにいていいんだ。』
と思えるようになった。

それからぼくは、ちよつとずつ自分を變
えることが出来るようになった。六年生のぼ
くは變つた。

『行つてきますよ。』

『行つてらっしゃいよ。』

これは毎朝のお母さんとの会話だ。あんなに
行きたくなかつた学校に毎日笑顔で通つてい
る。あの不安な気持ちやモヤモヤはどこにい
つてしまつたのだろうか。今は毎日学校に行
くことが楽しくて仕方がない。あと半年で中
学生になる。ちよつと不安だけど今のぼくな
らぎ』と大丈夫だ。過去のぼくが今のぼくを
支えてくれている。そして過去のぼくと今の
ぼくが未来のぼくを応援してくれている。

指導者の言葉

本校では、「論理的思考力の育成～共感的人間関係を基盤とした『学び合い』の授業づくりを通して～」を研究主題に掲げています。研究主題を受け、論理的思考力を育成するために、共感的人間関係を基盤とした豊かな「学び合い」が生まれる授業実践を行っています。更に、表現する力の育成に向け、月1回「思考スキルタイム」の時間を設けるなど、日々の教育活動に取り組んでいます。

作文指導に当たっては、主に次の3点に留意しました。

1点目は、「B書くこと」と「C読むこと」の領域を関連付けた指導を行ったことです。まず、

単元「ずい筆を書こう」(B書くこと)において、体験した出来事を思い出させ、出来事とそこから考えたことを整理して文章を書くことができるように指導しました。教材文「風切るつばさ」(C読むこと)を読み、作者の文の構成の仕方や、冒頭や終末の書き方の工夫について話し合わせ、中心となる人物の心情の変化を表現する方法について指導しました。

2点目は、自己内対話を何度も行わせたことです。自分の内面と向き合い、自己を見つめ直しながら書くように指導しました。

3点目は、描写の仕方の指導を行ったことです。自分の心の動きを読み手に伝える際に、会話文や心内語だけでなく、比喩表現等の効果的について指導しました。

本作品は、自分の成長を筋道立てて書くことができている。更に、自分の気持ちを読み手に分かりやすく伝えるために心内語を使ったり、比喩表現等を使ったりして表現し、自分の気持ちの変化が読む人に伝わりやすくするよう、現在・過去・現在という構成で表現しています。

また、読み手を引きつけるように、自分のもっとも伝えたい思いが表れるように題名も工夫しています。

自分の過去を振り返ることで、今の自分や未来の自分を支えているのは過去の自分や家族の愛情だということに気付いた丹下君を誰もが応援したくなるような作品になっています。